



Title	公衆衛生を「学ぶ」から「実践する」へ：メルボルンでの経験を通じて
Author(s)	石田, 茉莉絵
Citation	目で見えるWHO. 2026, 95, p. 20-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104523
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

公衆衛生を「学ぶ」から「実践する」へ メルボルンでの経験を通じて



メルボルン大学博士課程

The University of Melbourne, Doctor of Philosophy

石田 茉莉絵 (いしだ まりえ)

信州大学卒業。看護師として病院勤務後、2019年にメルボルン大学でMPH取得。同大学およびビクトリア州保健省での勤務を経て、現在メルボルン大学博士課程に在籍。

はじめに

私は現在メルボルン大学の Nossal Institute for Global Health で博士課程に在籍しています。2019年には同大学で公衆衛生修士を取得し、その後、ビクトリア州政府および大学での勤務を経て博士課程に進学しました。オーストラリアでの就職経験も含めてお話ししたいと思います。

留学の動機

学部時代にベトナムの孤児院でボランティア活動に参加した際、貧困と健康格差を目の当たりにし、いつか国際保健に携わりたいという思いを抱きました。その後、看護師として病棟勤務をする中でも、経済的困難を抱える患者さんと接する機会が多くあり、ある退院指導の際には、「今は帰りのバス代がないので、生活保護の受給日まで退院を待ってほしい」と言われたこともありました。こう

した経験を通じて、医療だけでは解決できない健康の社会的決定要因に関心を持ち、公衆衛生を学びたいと考えるようになりました。

メルボルン大学について

メルボルンはオーストラリア大陸の南部に位置し、日本と同様に四季がある、世界でも住みやすい都市として知られています。メルボルン大学の School of Population and Global Health では、国内の健康課題や保健政策、医療システムの研究だけでなく、先住民の健康問題やアジア太平洋諸国を中心とした国際保健の研究も盛んに行われています。キャンパス周辺には大規模な医療施設や医学研究所があり、共同研究も活発です。

公衆衛生修士課程 (MPH) は1学年約200名で、その約半数を留学生が占めています。私が在籍していた当時は特にインドネシアや中国からの留学生が多かったです。私は国際保健と医療経済を中

心に履修し、2年目には現在所属する研究センター (Nossal Institute for Global Health) で1年間の研究プロジェクトに参加しました。初めて使用する STATA に苦戦しながらも、多重疾患と医療サービス利用に関する修士論文を完成させた経験は、その後の研究活動の大きな礎となりました。

修士課程修了後のキャリアとロックダウンの経験

2019年に修士課程を修了後、修士論文を審査いただいた教授からお声がけをいただき、Nossal Institute for Global Health で勤務を始めました。しかし、勤務開始間もなく新型コロナウイルス感染症のパンデミックが発生し、多くの国際プロジェクトが中断を余儀なくされました。そのような状況の中、ビクトリア州政府保健省が新型コロナ対応部門を立ち上げることになり、私は疫学者として派遣され、対策本部の立ち上げ段階から



写真1 メルボルンのシンボル、フリンダース駅



写真2 1880年にメルボルンで開催された万博のために建てられたRoyal Exhibition Building。メルボルン大学の期末試験や卒業式はここで開催されます。

参加しました。感染者数の集計体制の構築、症例定義の設定、感染経路の特定、関係機関やメディアからの問い合わせ対応など、多岐にわたる業務に携わりました。パンデミック初期には、チーム全員で早朝から深夜まで働く日々が続き、業務支援のために保健省に出向していたオーストラリア国防軍 (Australian Defence Force) と協働する機会もありました。メルボルンは世界で最も長期にわたるロックダウンを経験した都市です。外出時間制限や移動距離制限、通勤、就業などの制限が厳しく課されました。疫学者として公衆衛生に貢献する立場である一方で、私自身も一市民として、日本では経験したことのないような厳格な措置を体験することになりました。この経験は、「公衆衛生上の安全」と「個人の自由・人権」とのバランスをどう保つべきかという根源的な問いを突きつけるものであり、公衆衛生の本質について深く考える機会となりました。

博士課程進学という選択

パンデミック対応の現場では、疫学分析と報告データの正確性に責任を持つ立場となり、データが政策決定や市民生活に直結する重みを実感しました。この経験を通じ、データを倫理的かつ科学的に扱い、正確に読み取ることの重要性を強く認識しました。学問としてより深く向き合いたいという思いが募り、博士課程への進学を決意しました。現在は社会疫学と医療経済の視点から、アジア地域における介護の需要と供給、そして世帯への経済的影響をテーマに研究を進めています。研究活動の一環として、国際学会およびオーストラリア国内の学会で成果を発表する機会も得ることができました。また、学業と並行して、世界銀行、アジア開発銀行、世界保健機関などからの支援を受けた国際プロジェクトにも携わっています。最近では、パプアニューギニア保健省と協働し、医療施設の数と規模、

医療人材数、医療物資消費量を把握し、それらをもとにプライマリ・ヘルスケアに必要な予算を推計する業務に取り組みました。さらに、アジア太平洋地域の低中所得国を対象とした疾病負担予測の研究にも携わり、エビデンスに基づく保健財政政策の重要性を実感しています。

終わりに

留学を通して得たものは、単なる知識や技術にとどまりません。人とのつながりや、日本の医療や社会制度を相対的に捉える視点を得る貴重な機会となりました。また、異なる文化や価値観のもとで生活した経験を通じて、日本の「当たり前」が必ずしも世界の基準ではないことを実感し、多くの気づきを得ることができました。公衆衛生の分野で留学を考えている方々にとって、本稿が少しでも参考になれば幸いです。



写真3 旧国会議事堂で開催された学会での発表の様子(Australian Health Economics Society)



写真4 国際学会 (International Health Economics Association)に同僚と参加しました。